1991年度埋蔵文化財発掘調査報告

市場垣内遺跡発掘調査概報
城山古墳発掘調査報告

１９９２年３月

河合町教育委員会

例　言

1．本書は1991（平成３）年度国庫補助事業、県費補助事業として河合町教育委員会が実施した市場垣内遺跡及び城山古墳発掘調査の報告書である。

2．市場垣内遺跡の現地調査は、1991年７月２日に開始し、1991年８月８日をもって終了した。

　城山古墳の現地調査は、1991年９月17日に開始し、1991年９月26日をもって終了した。

3．調査組織は下記のとおりである。

調査主体　　河合町教育委員会

調査担当者　河合町教育委員会事務局　社会教育課　吉村公男

調査事務局　河合町教育委員会事務局　社会教育課

　　教育長・浅芝辰夫　課長・福井裕幸　係長・竹田裕昭、森井幸夫(10／1から)、主事・吉川佳美、森川泰典、木戸正人

調査作業員

　市場垣内遺跡……青木勝義、平井藤太郎、北橋昇、松井正一、藤井清治、水田博三、中西靖男、山口英雄、北村勇、岡崎善之

　城　山　古　墳……水田博三、中西靖男、北村勇、岡崎善之

調査補助員

　市場垣内遺跡……冨田眞二・前坂尚志（以上、同志社大学)、中山采子、末廣春枝

　城　山　古　墳……中山采子

4．本書を作製するにあたり下記の諸機関ならびに諸氏のご指導・ご協力をいただいた。ここに記して謝意を表する。

奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、奈良国立文化財研究所

泉森皎、河上邦彦、辰巳和弘、佐々木好直、卜部行弘、今尾文昭、坂靖、北野隆亮、田中史生、粉川昭平、奥田尚、金原正明、牛嶋茂、永岡潤吉、石田義治、富井徹、古川賢三、永岡恭吉、松原良子、嶋田隆子、瀬戸剛　　（敬称略、順不同）

5．写真は一部を除き吉村が撮影した。

6．遺物の整理及び本書の作製は調査参加者及び小林美佐子があたった。

7．本書の執筆・編集は吉村がおこなった。

目　次

1991年度の埋蔵文化財の調査について……1

市場垣内遺跡発掘調査概報……2

城山古墳発掘調査報告……11

1991年度の発掘調査について

1991年度においては、河合町川合字市場垣内625－2番地に所在する市場垣内遺跡及び、城山古墳の史跡指定地内にあたる川合字山ノ間552－1番地の調査を行った。市場垣内遺跡については、住居建設に伴い事前調査として発掘調査を実施したものである。調査面積は約80㎡である。城山古墳については、調査地が史跡指定地に含まれることから、農機具小屋設置に伴い、史跡の現状変更許可願いが提出されたことをうけ、平成３年７月25日付けで文化庁より条件付許可となったことにより、発掘調査を行った。現状変更は約277㎡に及び、うち約20㎡を調査した。

以上の２件が国庫・県費による補助をうけ発掘調査を実施したものであるが、この他、下記のとおり計８件の埋蔵文化財調査をおこなっている。

1991年度埋蔵文化財調査一覧

遺跡名	調査地	調査原因	調査期間	調査区分	調査面積	備考
高山３号墳	河合町穴闇 169	児童プール	1991．6．10 ～ 6．17	発掘調査	20 ㎡	河合町 文化財調査報告第５集
市場垣内遺跡	河合町川合 625 － 2	個人住宅建設	1991．7．2 ～ 8．8	発掘調査	80 ㎡	国庫補助事業 本書
城山古墳	河合町川合 552 － 1	農機具小屋設置	1991．9．17 ～ 9．26	発掘調査	20 ㎡	国庫補助事業 本書
化石出土地	河合町穴闇 568 － 20 － 1 568 － 125	宅地造成	1991．11．14 ～ 11．15	発掘調査	50 ㎡	受託事業 文化財調査報告第７集
史跡ナガレ山古墳東隣接地	河合町佐味田 2128 2184	浸透実験施設	1992．1．23 ～ 2．3	立会調査	600 ㎡	建設省大和川工事事務所
遺跡地図 No.17	河合町川合 574 － 2	集会場兼消防機庫	1992．2．10	立会調査	94 ㎡	河合町
宮堂遺跡	河合町川合 461 － 4 周辺道路	公共下水道工事	1992．2～3	立会調査	330 ㎡	河合町
長楽遺跡	河合町長楽 468 周辺道路	公共下水道工事	1992．2～3	立会調査	72 ㎡	河合町

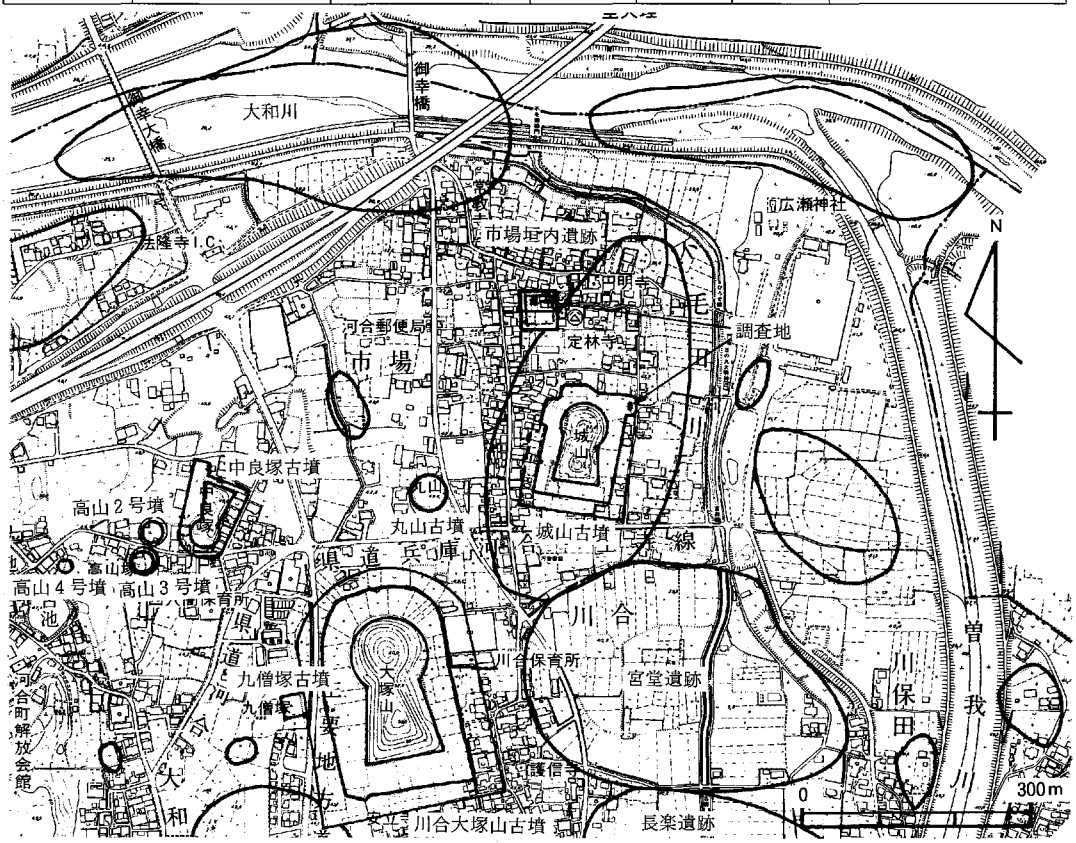


図１　発掘調査地位置図

市場垣内遺跡発掘調査概報

位置と環境

河合町は奈良盆地の西部に位置し、奈良盆地を流れる多くの河川が合流して大和川となる場所である。このため、河合町の北東部は「川合」と呼ばれ、川合大塚山古墳をはじめ、多くの遺跡が広がっている。市場垣内遺跡はこの川合の地に位置し、史跡城山古墳の北西にあたる。この遺跡は『奈良県遺跡地図』には掲載されていなかった遺跡であるが、1989年度の分布調査により、周囲に濠を残していること、中世から近世にかけての遺物が多量に散布していること、地元での伝承等から、中世の環濠をもつ遺跡と推定するにいたった。

この遺跡は現状では北側と東側に濠が残っており、1990年３月までは西側でも濠が観察できた。これらの状況からすると、南北約50ｍ・東西約40ｍの範囲を濠によって区画された遺跡である。この遺跡は地元では吉田山城主義辰の館と伝承されている。吉田義辰は永禄年間（1558～1569）に松永久秀の侵入を受けると、廣瀬神社の南西方に在る一丘陵に城砦を築いて奮戦したが、力及ばず敗北し、穴闇において自刃したとされている。また、『多聞院日記』・『大和記』等には松永久秀が片岡城を攻めたのは永禄12(1569)年のことと記され、この時川合の近辺も戦場となったとしている。そして、『樋口氏系図』等には河合城の名がみえ、現在の城山古墳がそれにあてられている。

1989年度の町内遺跡詳細分布調査中に、住宅建設が計画されたことから、1990年10月15日から12月４日まで、遺構が残存しているかどうかを確認するため試掘調査を行った。その結果、調査面積が少ないので建物等の痕跡を明瞭に検出することはできなかったが、遺物を包含する層が厚く堆積していることが認められた。この包含層の最下位では16世紀段階に考えられる瓦質の擂鉢（図８―１）が出土し、伝承にいう遺跡の時期と符合し、当遺跡の形成がこの時期に近い年代に行われたと推定できた。このため、1991年度において、土木工事に伴う緊急調査としての発掘調査を実施した。調査は実働21日を要した。

調査結果

１．遺構

現状でもよく旧状を留めている濠は、北側の濠の上端での幅は４～５ｍを測るが、本来はさらに広かったようで、７ｍ以上になるようである。深さについても、現状では１ｍ強であるが、発掘調査では濠の底は、諸般の事情により検出できなかったが、標高41ｍより下になるようであり、本来は２ｍを超える深さであったと思わ

写真１　発掘調査前

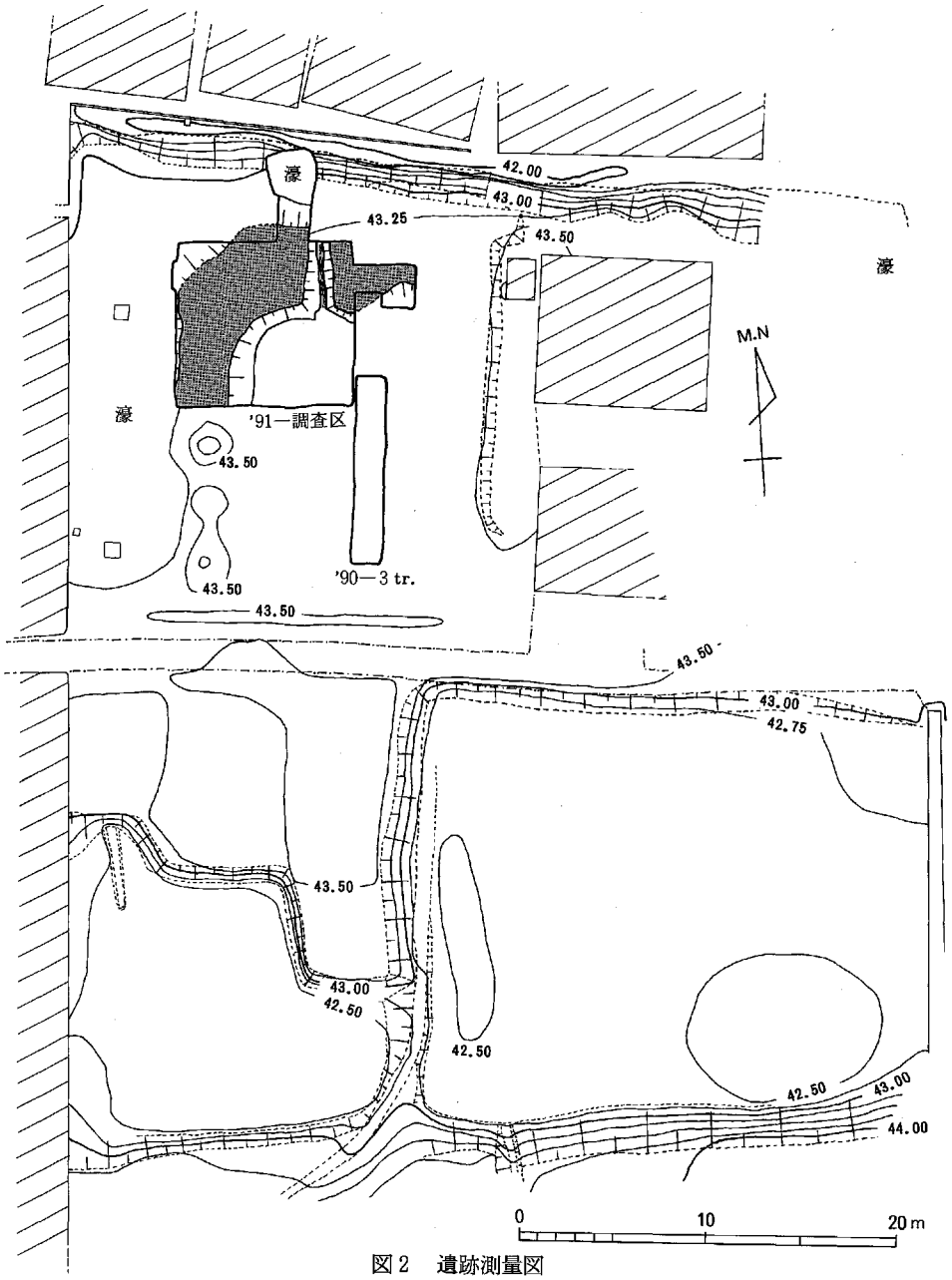


図2　遺跡測量図

れる。調査区内の濠の南側は、濠に沿った形で地山を掘り残し、その上に幅3～4mにわたって若干の盛土を施し、土塁状にしているようである。既に上面は造成によって削平されているため、高さについては不明である。また、地山直上面には瓦器碗（図9—12）が完形に近い形で遺存しており、16世紀代の遺構に先行するものが存在したようである。

調査区の南東側は標高42mまで落ち込んでいる。この落ち込みは試掘調査時の第3トレンチの中央部にまで広がっているようである。このような広がりからは池状の遺構と考えられるが、配石等は見られない。

さらに、調査区の北東部で、北側の濠と南側の池状遺構を繋ぐように南北に10本を連ねて配置さ

写真２　遺構全景

れた土管（図４・５）が検出されている。土管の据え付けは地山を掘り込んで溝をつくり、明黄色粘土で底のレベルを整えて据え付け、同じ土で上面を覆っているようである。土管の底のレベルは42.40ｍ前後であるが、中程でやや高くなっている。しかし、うけ部の方向から南側から北へ排水するために設置されている。また、土管の底のレベルと池状遺構の底のレベルとは60㎝程の差がある。土管は瓦質で、現在のいわゆる土管とほぼ同じ形をしており、うけ部が外にひらく土管の出現を考える上で興味ぶかい資料である。

写真３　土管出土状況

調査区の中央部で埋甕が検出されている。この甕は池状遺構が完全に埋まってから、穴を掘って据え付けている。上部約３分の２は1990年の造成により失われている。信楽の大甕で、近世の建物に伴うものであろう。また、試掘調査時の第３トレンチで埋桶の痕跡を検出している。この埋桶の上面で焼けた壁土の塊を検出しているが、この付

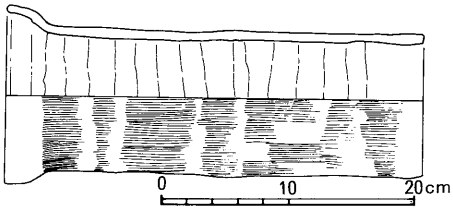
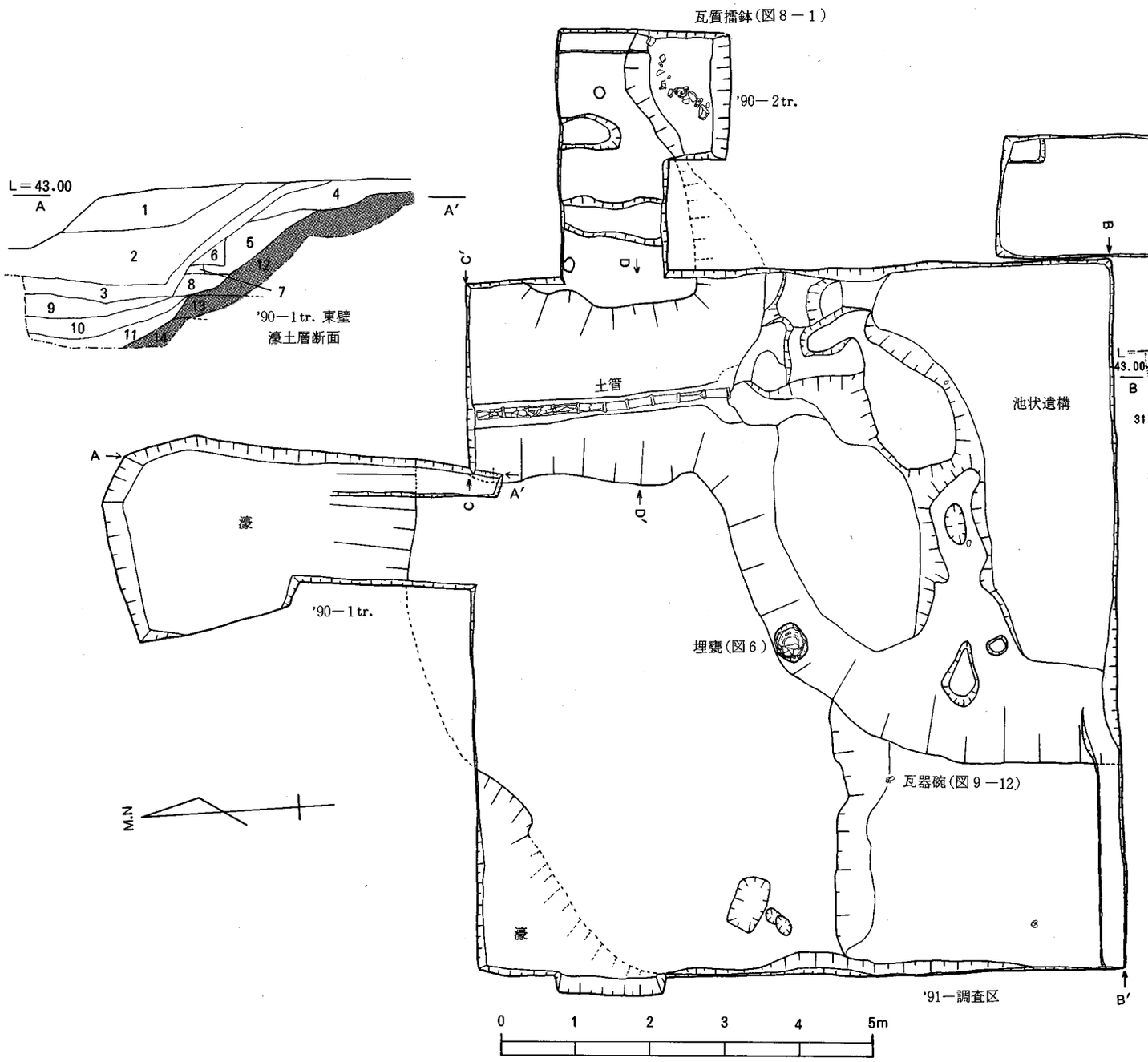
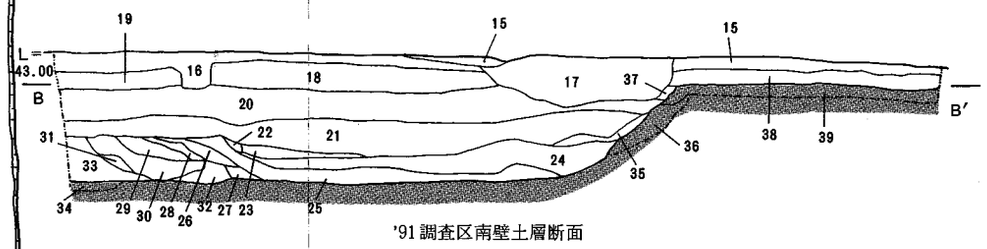
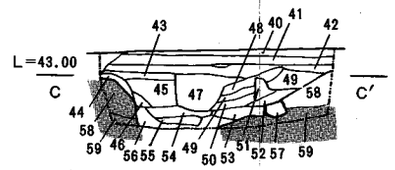


図５　土管（№６）実測図

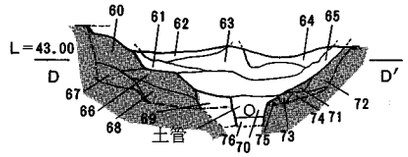




'91調査区南壁土層断面



'91調査区北壁土層断面



排水管部分畔土層断面

試掘第1トレンチ東壁
濠土層断面図

1 暗茶褐色土（盛土）
2 明黒褐色土（盛土）
3 黒褐色土
4 暗茶褐色土
5 暗黄褐色土
6 黒色土
7 暗茶褐色土
8 明黒灰色粘質土
9 黒茶褐色粘土
10 黒色粘土
11 明灰色粘土
12 明黄色粘質土（地山）
13 淡青灰色砂質粘土（地山）
14 青灰色砂質粘土（地山）

'91年度　調査区
南壁土層断面図

15 表土
16 暗茶褐色土
17 炭（1990年の攪乱）
18 淡黄褐色粘質土
19 淡黄灰色粘土
20 暗黄褐色粘質土
21 暗茶褐色粘質土
22 明黄褐色粘土
23 茶灰色砂土
24 灰褐色粘質土
25 明黄色粘土
26 暗灰色砂質土
27 明灰色粘土
28 明黄色粘土
29 暗灰色砂質土
30 淡黄色粘土
31 明灰色粘土
32 明灰褐色砂質土
33 明黄色粘土
34 茶灰色砂（地山）
35 茶褐色土
36 黄褐色砂質土（地山）
37 黄褐色土
38 淡灰褐色土
39 明黄褐色土（地山）

'91年度　調査区
北壁土層断面図

40 表土
41 暗茶褐色土
42 暗茶褐色土
43 明黄色粘土
44 淡黄色砂質土
45 淡青灰色粘土
46 淡黄色粘土
47 暗茶褐色土
48 淡茶褐色土
49 淡黄褐色粘質土
50 淡茶褐色土
51 暗茶褐色土
52 暗黄褐色粘質土
53 明黄褐色土
54 明茶褐色土
55 明茶褐色砂質土
56 灰褐色砂土
57 石
58 明黄色粘土
59 明黄褐色砂土

排水管部分畦　土層断面図

60 淡黄色粘土（地山）
61 淡黄褐色粘質土
62 淡茶褐色粘質土
63 明茶褐色土
64 淡茶褐色土
65 明黄褐色土
66 暗茶褐色粘質土（地山）
67 灰褐色砂質土（地山）
68 灰褐色粘質土（地山）
69 明黄色粘土（埋土）
70 暗茶褐色粘質土（土管埋土）
71 明灰褐色砂質土（地山）
72 淡黄色粘土（地山）
73 暗茶灰色砂質土（地山）
74 淡黄色粘土（地山）
75 淡黄色粘土（地山）
76 暗灰褐色土

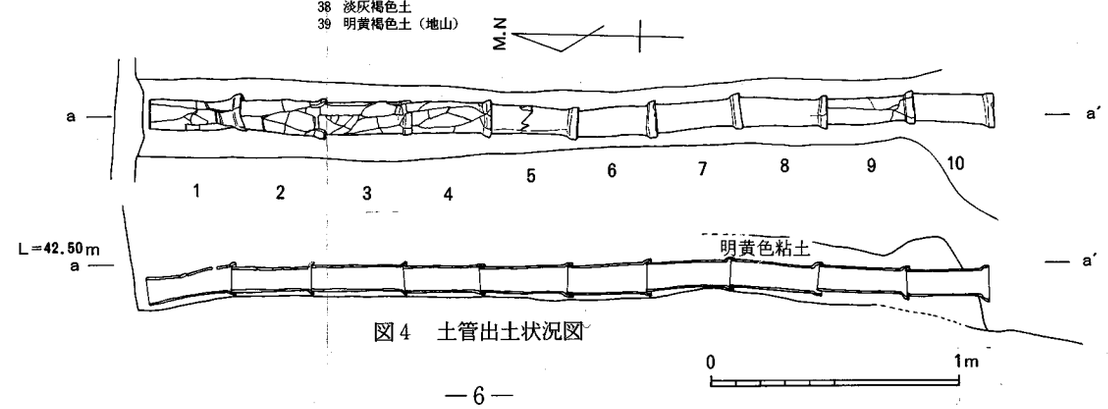


図3　遺構平面図・土層断面図

図4　土管出土状況図

近には昭和の初期まで土蔵があったとのことであり、土蔵が火災にあったか、取壊しの際の片付け等により火を受けているようである。このことから、埋桶の時期は昭和初期以前であり、その配置の状況から考えると埋桶と埋甕の両者は同時期に機能していたと思われる。

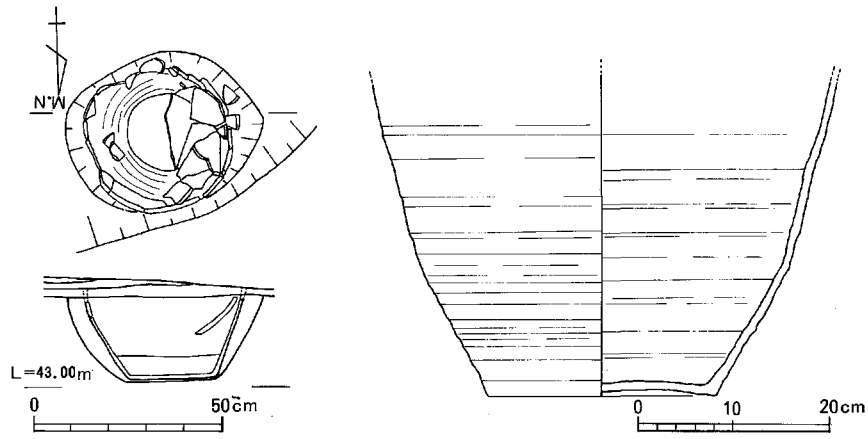


図6　埋甕　遺構平面・断面図　遺物実測図

2．遺物

今回の発掘調査によって出土した遺物の大半は陶磁器である。陶磁器は信楽・備前が多いが、肥前・唐津系の碗・小鉢（図9－2・9・10・11）も若干含まれるほか明朝の染付（図9－4）や白磁（図9－5・7）・青白磁（図9－6）、李氏朝鮮の褐釉の船徳利（図9－8）という輸入品もみられる。また、時代は下るが、くらわんか碗（図9－1）に代表される日用品も出土しており、近世にも生活の場であったことが判る。陶磁器以外には土師器・瓦器・須恵器・埴輪・銭貨等がある。このうち土器類は羽釜（図8－6・7）や甕（図8－2・3・4・5）・鍋（図8－8・9）・皿（図9－3・13・14・15・16）といった日用品が多い傾向にある。図9－17は陶器の高台部を打ち欠いたもので、めんことして使用されたものである。

埴輪は、円筒埴輪と思われる破片が数点出土している。須恵質のものも含まれ、城山古墳の発掘調査で出土した埴輪に極似しており、城山古墳そのものの埴輪であるのか、城山古墳と同時期の古墳がかつて調査地に存在していたのかという問題が残る。また、図7は円筒埴輪の底部である。外面調整はタテハケであるが、一部にヨコハケが認められる。さらに、注意すべきことに、底面にワラビの葉の痕跡が認められる。この痕跡を観察すると、葉が開ききり、かつ、まだ葉が枯れていない状況（写真4）が見られ、埴輪を製作した季節を示している。

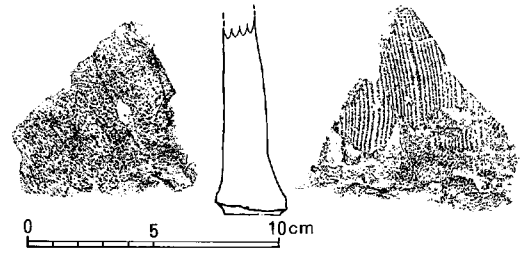


図7　埴輪

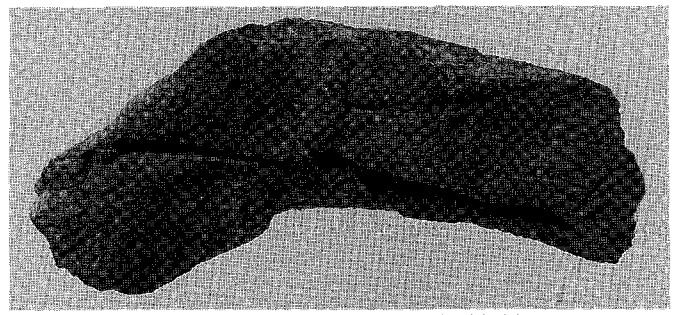
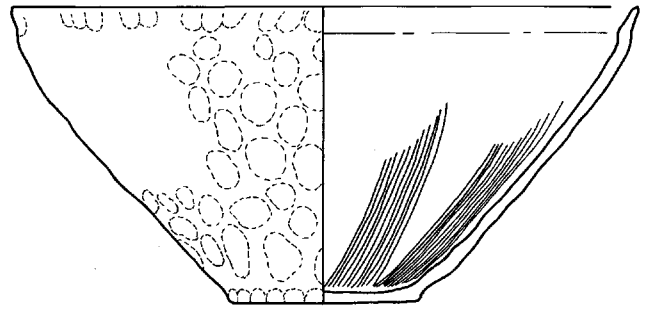


写真4　埴輪底部（牛嶋茂氏撮影）（実大）

この他、火打石（図10—3・4）や鉄滓が若干出土しており、小規模な鍛冶を営んでいたようである。火打石の材質は2例ともサヌカイトである。

図10—1は硯で、両面を使用している。図10—2は砥石である。

陶磁器類は、池状遺構の埋土の最上層内の土壙から一括で出土したものが多く、時期差を層位によって把握することはできない。また、土師器等も多くは池状遺構の堆積土からの出土であり、整地にあたって投棄されたものであろう。このため、中世から近世にかけての遺物が混在している。



3．まとめ

奈良盆地における中世の環濠集落

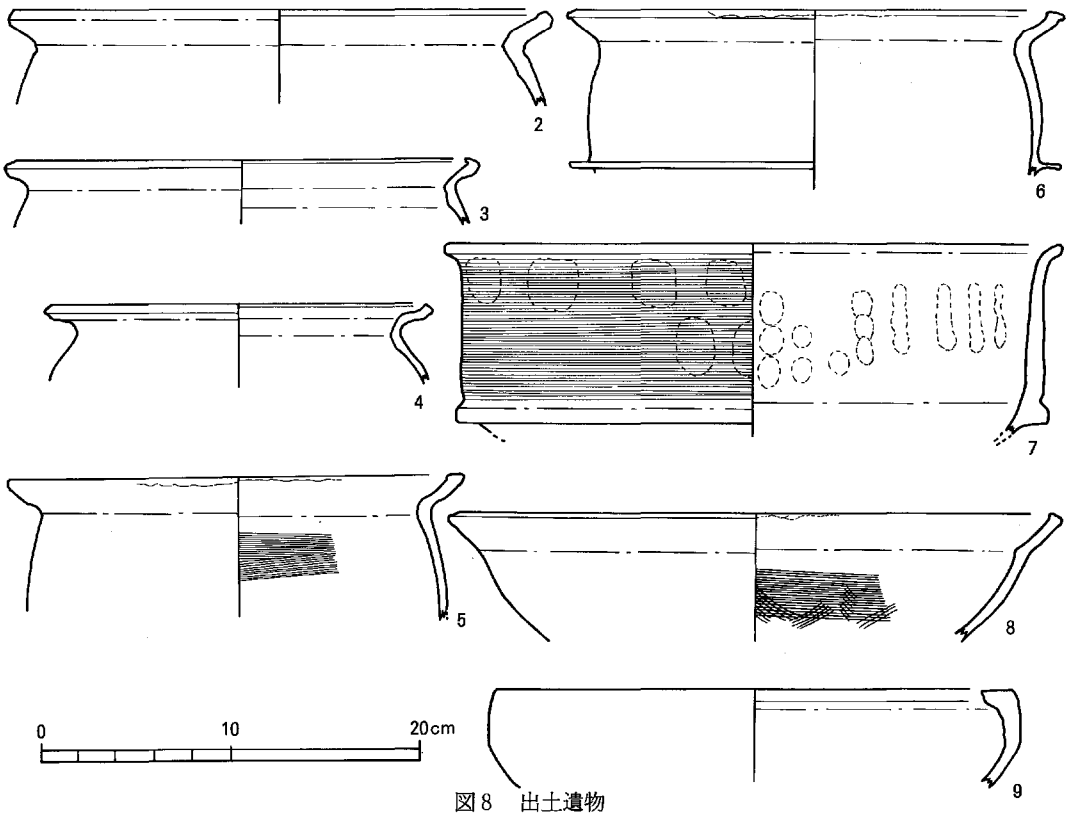


図8　出土遺物

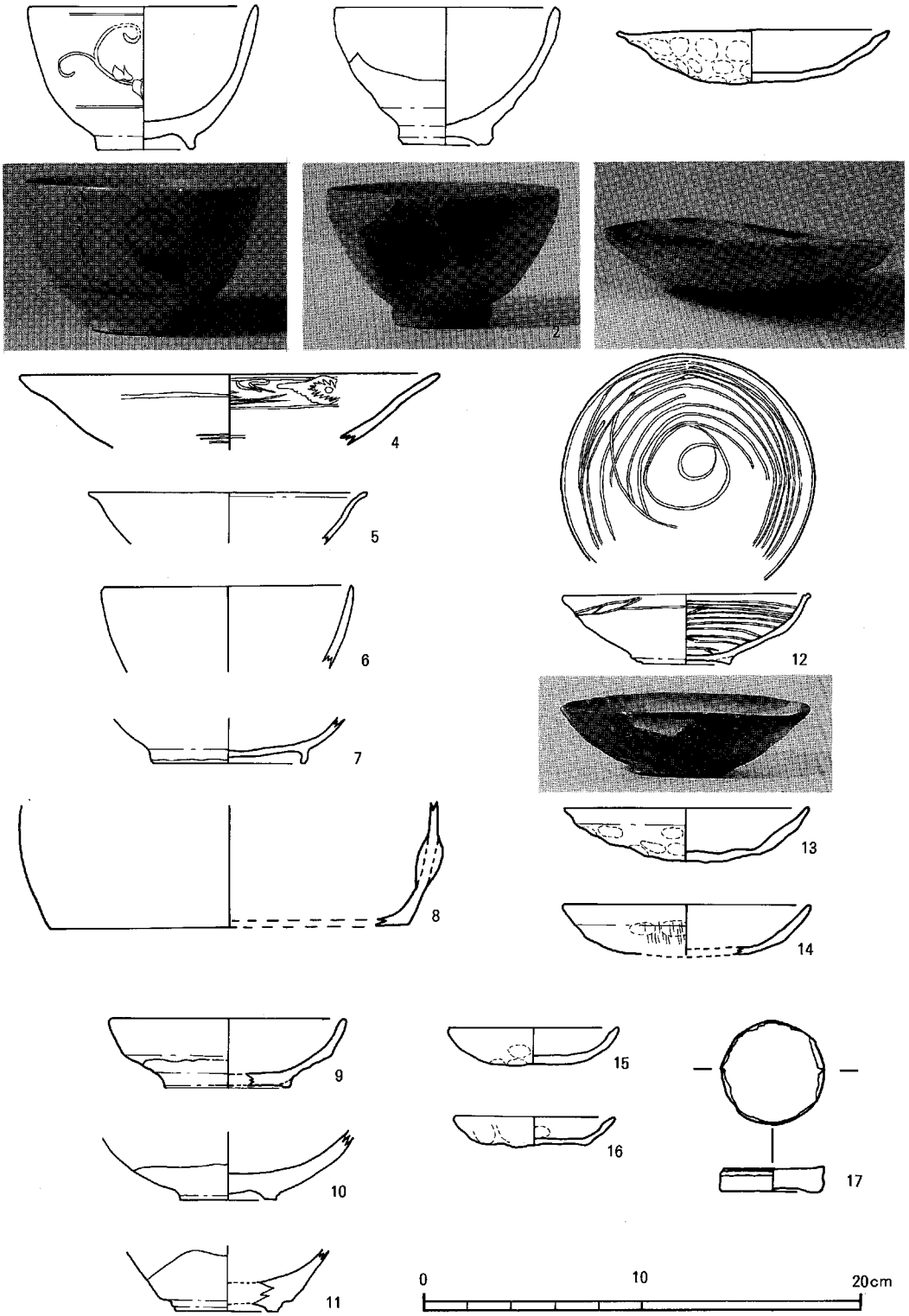


図9　出土遺物

（館）としては、若槻遺跡・布留遺跡（豊井打破り地区）・法貴寺遺跡・金剛寺遺跡などがある。これらの多くは一辺が40～50mの方形に区画されているという点で共通する。このような遺跡は、現在でも奈良盆地の各所にその痕跡を留めており、今後、益々調査事例が増してくるものと思われる。その中にあって、市場垣内遺跡は、大和川に接して位置し、その地名からも偲ばれるとおり、遺跡の周辺はかつて市場として栄えたという伝えが残っている。また、この付近は川合と呼ばれるごとく、奈良盆地の諸河川が合流する地点であり、川合浜という船着場が設けられた交通の要衝であった。このことは、奈良盆地の他の遺跡に較べて輸入陶磁の量が多いという点にも表れている。

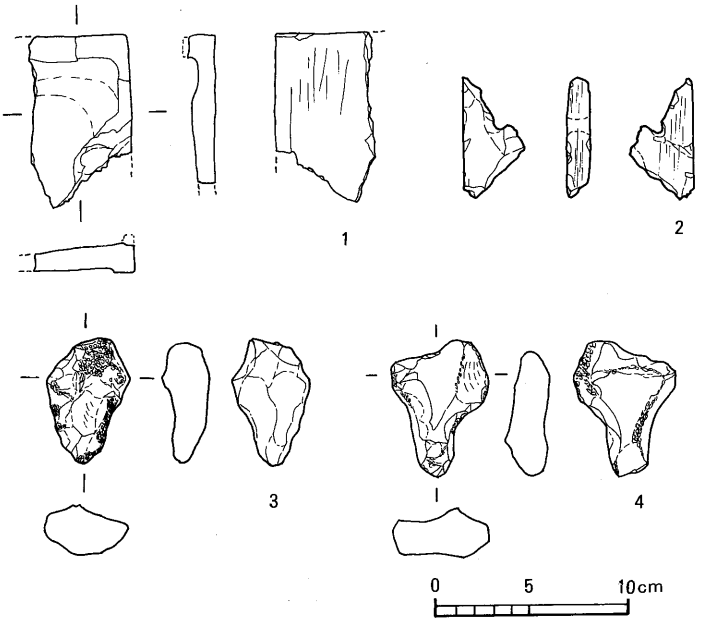


図10　石製品

遺跡の北西部に存在する池状遺構は、若槻遺跡に類例が求められるが、市場垣内遺跡のような深いものではなく、浅いものである。今回の発掘調査では、この池状遺構の全容は把握できなかったので、確実に池であるとはいえないが、粘土の堆積の状況及び土管を連ねた排水管等から、一時期滞水していたようであり、池の可能性が高い。

この遺跡の形成の時期は、調査面積が少なかったために決定できなかったが、13世紀代にすでに前身となるような遺構の存在が想定できる。土管を連ねた排水管は、土管の下にあった青磁の破片や瓦質の擂鉢から16世紀代に据えつけられたものとしてよいであろう。池状遺構は土管が据え付けられてからすぐに徐々に埋没してゆき、ある時期に一気に埋められ、17世紀に入るまでにはほとんど埋まっていたようである。しかしながら、周囲の環濠は現代まで、何度か掘り返されながらその姿をとどめてきた。

ところで、市場垣内遺跡の南側には城山古墳が存在するが、文献には河合城として記載されている。河合城と呼ばれたのは城山古墳だけではなく、川合大塚山古墳もしばしば河合城に充てられている。広瀬神社に伝わる絵図には、大塚山古墳を城山と表記している。そして、大塚山古墳に接して、現在も市場垣内遺跡と同様の地割りが残存していることも興味深い。このように、戦時における砦と、その近くの日常の拠点である環濠集落（館）が対になるようであり、今後、他の地域での調査が期待される。

城山古墳発掘調査報告

はじめに

調査地は史跡城山古墳の周濠北東部である。城山古墳の周濠は当該調査地の部分で東に突出している。従来より、この突出部は古墳築造時に周濠の排水、水量調節、墳丘盛土を得るため等の必要性から現在見るような状態になったものか、後世の田畑としての開墾に伴う土木工事によるものかの論議がなされてきた。

このため、今回の調査では、トレンチを南北に設定し、排水施設等が設けられているかの確認を目的とした。

調査は農機小屋設置位置より東側に、幅３ｍ、長９ｍのトレンチを設定し、盛土は重機により除去し、耕土より下層は人力により掘削した。

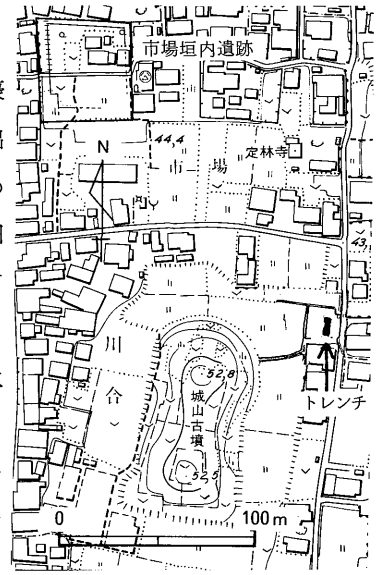


図11　トレンチ位置図

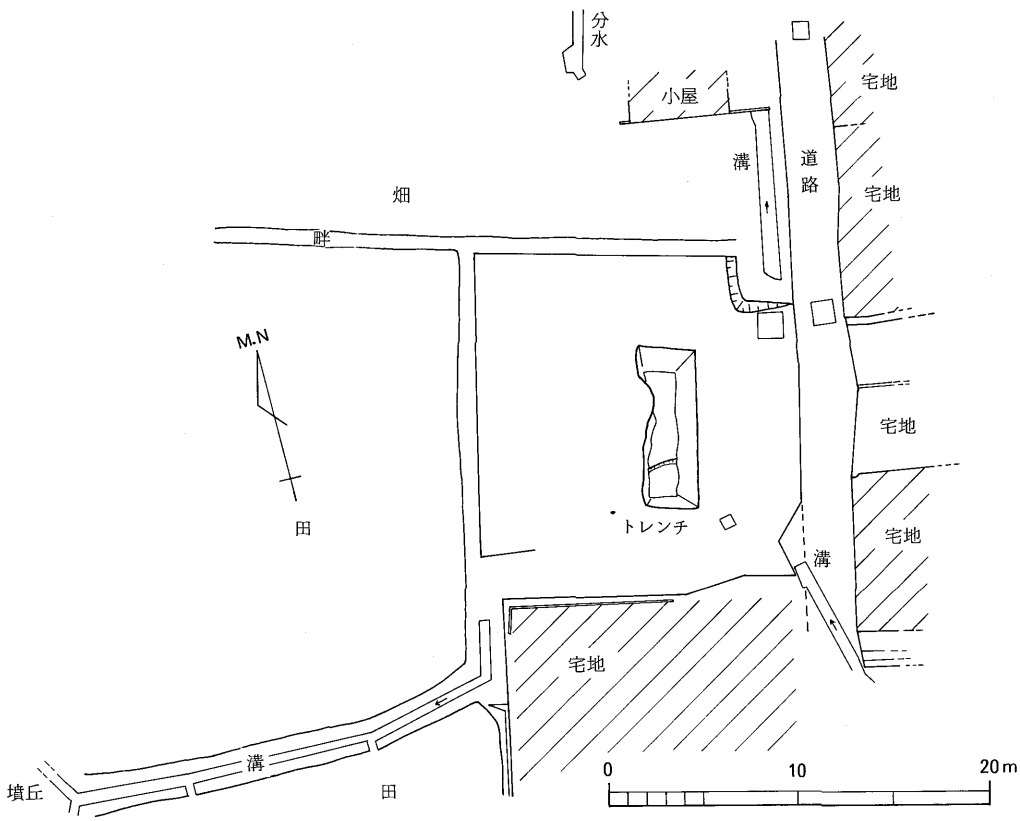


図12　調査地平面図

調査結果

1．層位

海抜 42.55mより上は現状変更に伴う盛土である。基本層位は上層から①盛土（第1層）、②耕作土（第2層）、③包含層（第3層～第19層）、④地山となっている。③の包含層は大きく2つの土層に分かれ、上層（第3層）は約30cmの厚さの青灰褐色砂質粘土で、包含される遺物の量は下層に較べて少なく、かつ細かい破片が多い。下層（第4層～第17層）は第3層より黄色がかった土層で、含まれる遺物は上層に較べて大きい破片が多い。また、トレンチ南端で落ち込みが検出されているが、この遺構の埋土は第18・19層である。

何れにしても各層はほぼ水平堆積を示している。

2．遺構

トレンチ南端で落ち込みが検出されている。この落ち込みは海抜 41.60mの高さから地山を掘り込んでいる。トレンチ内では南側の上がりの部分は検出されておらず、土壙状になるのか、溝状を呈するかは今回の調査では確認できなかった。また、トレンチ南東隅で水抜き用の穴をあけたが、この底に直径15cm程度の礫があり、それより下部は青灰色の砂（地山）になるので、この遺構の深さについては、海抜 41.25mまでの、掘り込みの上端から約35cmである。なお、調査の進行過程の中で、これ以上調査を進めることは非常に危険と思われたため、この落ち込みの埋土については全てを除去せず、上面を検出するのみにとどめた。

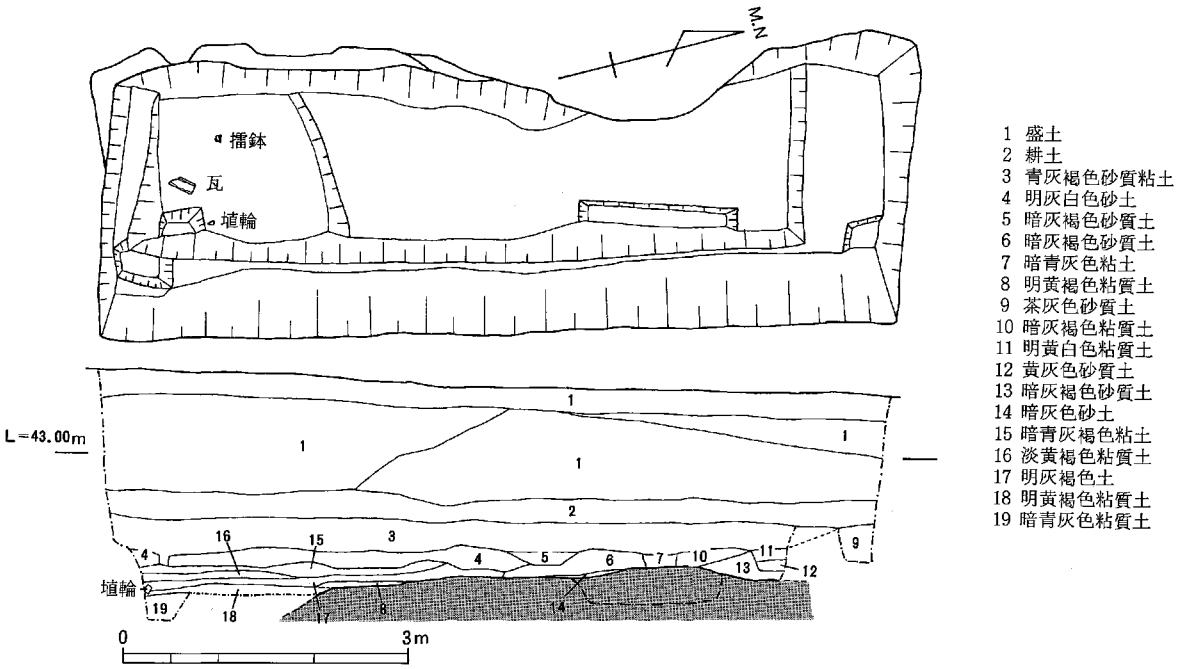


図13　遺構平面図及び東壁土層断面図

3．遺物

今回の発掘調査によって出土した主な遺物は次の通りである。

埴輪（図14―１～４）　全て円筒埴輪の破片と思われる。凸帯は図14―３・４のようにほとんど突出しない。図14―１・２は底部の破片である。これらには底部調整はみられない。なお、図14―１・３・４は須恵質である。外面調整はタテハケが主体である。

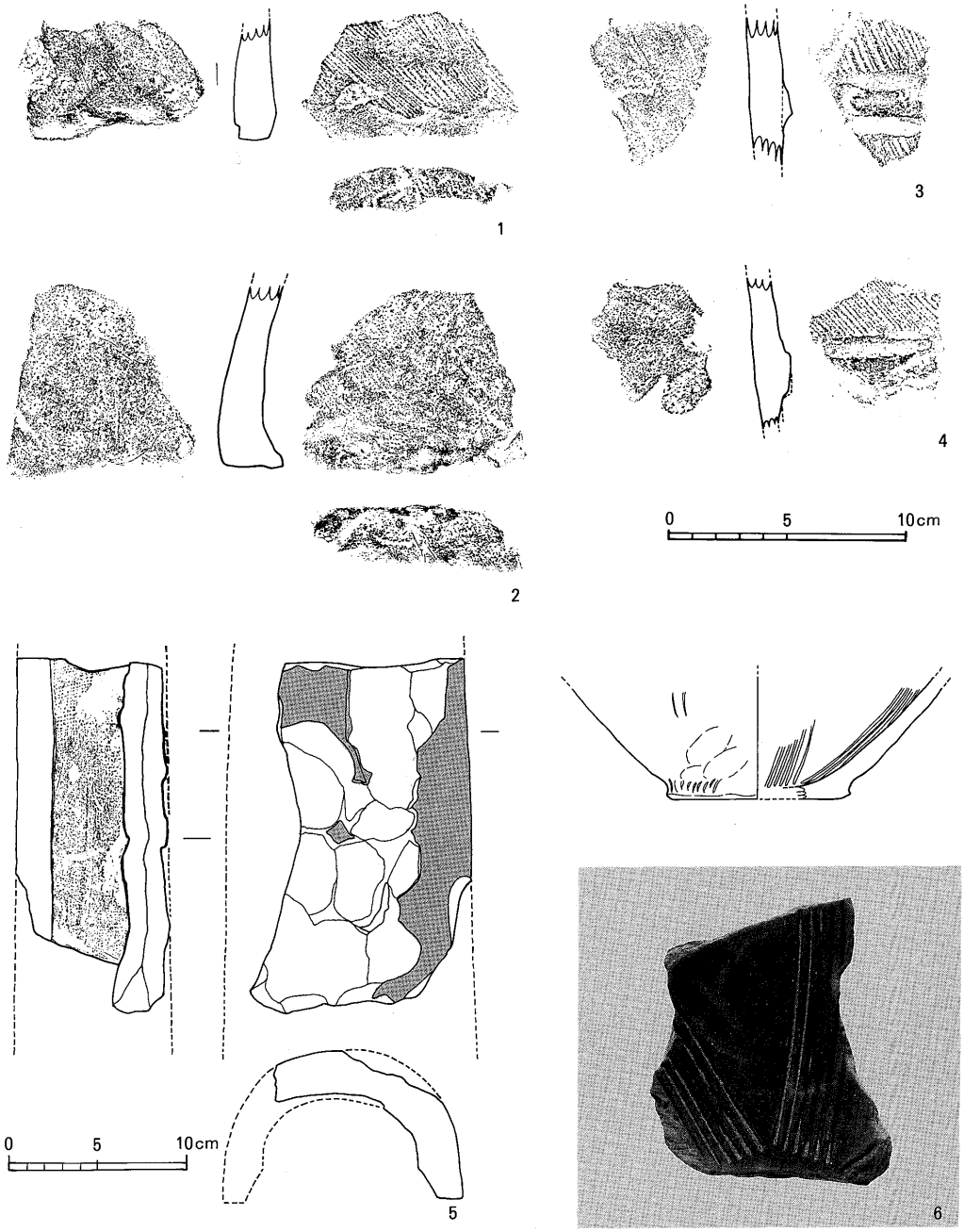


図14　出土遺物

瓦　（図14―５）　丸瓦で内面に布目が見られる。

擂鉢（図14―６）　瓦質で櫛目が粗く少ない。市場垣内遺跡出土の瓦質擂鉢よりやや厚手であるが、ほぼ同様のものである。

まとめ

調査は小面積の発掘に留め、盛土が厚く、かつ耕土から地山面までの包含層も予想以上に厚かったので、トレンチが崩壊する危険が伴い、充分な調査ができたとはいえない。土層や地山面で検出した遺構等の所見から、排水施設や濠であることを積極的に示す根拠はなく、この部分が、城山古墳築造当初から周濠の突出した部分であったかどうかは不明である。中世以降は水田もしくは城の濠となっていた可能性が高く、出土した遺物に円筒埴輪の底部が含まれることを重視すると、ある時期に本来の外堤が壊され、水田もしくは城の濠として拡張されたと想定することも可能である。

現在、調査地の北側に定林寺という寺があるが、この寺には平安時代末期の地蔵菩薩をはじめ、11世紀から13世紀にかけての仏像が安置されている。これらの仏像は城山古墳の南側に広がる宮堂遺跡の位置にあったとされる「定林寺」から移されたものとされている。廣瀬神社に伝わる絵図には、この宮堂遺跡の場所に聖徳太子の建立として大伽藍が描かれている。この絵図は室町時代の後期から江戸時代の初期にかけて描かれたものとされるが、その時期には寺が存在していたようである。そして、現定林寺の位置には、かつて廣瀬神社の神宮寺があった。今次の調査によって一点ではあるが、瓦が出土していることは、調査地に接して、寺があったことを示している。

また、市場垣内遺跡出土の擂鉢と同様の瓦質の擂鉢が出土していることは、「城山」が市場垣内遺跡と密接な関係にあったことが窺い得よう。いずれにしても小規模な発掘調査であり、想像の域を出ない感があるが、今後この様な中近世の遺跡も重視していかなければならない。

古墳としての城山古墳には、地元で横穴式石室の存在を示すような話が語りつがれており、川合・穴闇に分布する古墳群の評価も今後の課題である。

写真５　城山古墳墳丘と調査地

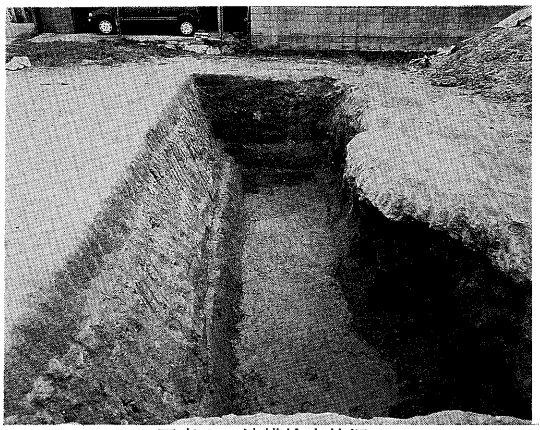


写真６　遺構検出状況

1991年度埋蔵文化財発掘調査報告
－河合町文化財調査報告　第６集－
１９９２年３月31日

編集・発行　河合町教育委員会
奈良県北葛城郡河合町大字池部3
TEL　07455－7－0200
印　　刷　明新印刷株式会社